

【東京】父の急逝で突然の院長就任「人生が180度変わった」-三浦和裕・三浦医院院長に聞く ◆Vol.2

閉院も考えたが「困っている」と訴える患者が多く、承継を決断

2025年9月10日（水）配信 m3.com地域版

2025年6月に40代で品川区医師会の会長に就任した三浦和裕氏。2012年から「三浦医院」の院長を務めるが、それは父の急逝に伴う「青天の霹靂だった」。幅広く診療していた父の方針を踏襲し、承継時はさまざまな専門の医師に学んで研さんを積んだという。医師になった頃から「病気ではなく、人を診たかった」と話す三浦氏に、医師を志した理由や承継時のエピソード、開業医のやりがい聞いた。（2025年7月17日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



三浦和裕院氏（医院ホームページから引用）

「患者さんとずっと付き合いたい」理想は総診の外科版

——三浦先生は2004年に帝京大学医学部を卒業しました。なぜ、医師を志したのですか。

率直に言うと、医師以外の仕事を想像できなかったためです。父が医師であり、私が小学2年生くらいの頃にこの三浦医院ができました。当時は学校が終わると父の診療所に行き、従業員さんに宿題をするのを見てもらっていました。院内では白衣姿の父が歩いている姿も目にしていました。そんなふうに医療が身近にあったので、他の選択肢が分からなかったのです。反抗期もあって父への思いは時期によって変わりますが、それでも、「人を治す仕事はやっぱりすごいな」と思っていました。

——大学卒業後は帝京大学医学部附属溝口病院、東京警察病院外科、聖マリアンナ医科大学病院消化器一般外科に勤務します。外科を専門にした理由をお聞かせください。

「患者さんとずっと付き合っていきたい、病気ではなく人を診たい」と思っていたためです。溝口病院に入職したのもこうした希望があつてのことで、同院は大学病院の本院などに比べて規模が大きくはなく、一人の医師が専門性に偏らずに診療していました。外科医が胃カメラなどの検査をしてがんを見つけて手術し、がんが転移したら抗がん剤治療を行い、その後の緩和医療や看取りまで行っていました。そんな環境に魅力を感じた私は、今で言う総合診療科の外科版のようなことをやってみたいと考えていました。

しかし、時代とともに外科は手術に注力する診療科に変わっていきます。私の専門だった消化器で言えば、消化器内科が病気を見つけて消化器外科が手術をし、抗がん剤治療は腫瘍内科が、看取りは緩和ケア科が行うといったように、役割分担が図られていきました。こうした変化に身を置く中で、徐々に「人を診たい」という自分の希望とのずれも感じていくようになりました。

父の急逝で患者が訴え「困った人を放っておけない」

——そんな思いがある中、2012年に三浦医院の院長に就任します。資料によると、突然の出来事だったそうですね。

父の後を継ぐことはぼんやりと想像していましたが、「まさか」というタイミングでした。私が聖マリアンナ医科大学病院に入職して6年が経った頃、父が急逝したのです。私の結婚式を1週間後に控えており、式のスピーチで互いに何を話そうか打ち合わせたのが父との会話の最後となりました。

承継の準備は全くできておらず、一時は閉院も考えました。既存の患者さんへ紹介状を書き、畳んでしまおうかと。しかし、診療所を1日休んだ後、インスリンなどの薬がなくなって「困っている」と訴える患者さんがけっこういて。「これは放っておけない」と継ぐことを決断して診療を再開しました。もう、人生は180度変わりましたね。

——予期せぬ開業医への転身です。当時は苦労も多かったのではないのでしょうか。

開院時は周辺に診療所が少なかったこともあり、父は多くの診療科を標ぼうしていました。その流れを汲み、現在も当院は内科・外科・リハビリテーション科を標ぼうして幅広く診療しています。

そのため、承継した当初は自分の専門外の分野をいろいろと勉強しました。私は聖マリに勤めていた時に研修医や学生の指導を担当していたので、成長して私と異なる専門性を身につけた彼らに「この病気はどう治療するの？」などと相談しました。付き合いの乏しかった同級生にも連絡を取り、経営するクリニックに行って学びました。

他にも困ったのが、人事や労務です。経営に関することは勤務医時代に習っていないので全く分かりませんでした。この時も人に頼って教えを乞いました。大学とは違い、高校の同級生はさまざまな職業に就いているので、キャリアコンサルタントの友人などに部下への接し方を学ぶ、といったこともできました。

——その一方で、開業医としてのやりがいも感じていったのでしょうか。

やっぱり、人を診られるのは楽しいですよ。当院には父の代から継続して来院している患者さんがいるので、孫からおじいちゃん、おばあちゃんの3世代にわたってお付き合いのあるご家族もいます。性差や年代を問わず、いろいろな人のさまざまなお悩みに対応できるのは面白い。その意味では、医師になった頃の理想像に近づけているのかな、とも思います。

◆三浦 和裕（みうら・かずひろ）氏

2004年帝京大学医学部卒。帝京大学医学部附属溝口病院、東京警察病院外科、聖マリアンナ医科大学病院消化器一般外科を経て、2012年三浦医院院長。2025年6月品川区医師会会長に就任。日本外科学会外科専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、日本プライマリ・ケア連合学会プライマリ・ケア認定医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

